

## 地歴・公民科 資料 No. 66

もくじ

巻頭	中世史像の変化と鎌倉仏教(2)／平 雅行…………… 1
トピックス	日本の食料・環境問題を考えるための一視点 ～フードマイレージ・バーチャルウォーター・ バイオ燃料～／千葉 保…………… 6
シリーズ	地歴・公民科の授業づくり3 打ちこわしで米を撒くのはなぜ？ ～絵画資料を使った日本史の授業／柄澤 守… 10
図書紹介	…………… 16

### 巻頭

## 中世史像の変化と鎌倉仏教(2)

大阪大学大学院教授  
平 雅行



(014) 日本史B新訂版 執筆者

前回に引き続き、私たちの教科書『日本史B 新訂版』に関わる話をしたいと思います。今回は改訂のポイントのひとつである、中世の始まりを院政期からにした背景についてお話をしました。今回は中世仏教史、特に鎌倉新仏教についてお話したいと思います。

### 1. 「鎌倉新仏教」概念の破綻

これまで鎌倉時代の仏教は、鎌倉新仏教と旧仏教の復興運動の二つで記述されてきました。問題は、この両者の弁別が合理的根拠に基づいて成されているか、という点です。

たとえば、鎌倉時代の法相宗は斬新な思想を打ち出しました。法相宗の教えの根幹に五性各別説という考えがあります。人間に5種類のタイプがあるというのですが、この考えのポイントは「無性」、つまり人間の中には仏性を持たない者がいる、成仏できない人がいるという点です。それに対し、天台宗は「悉有仏性」といって、すべての人間に仏性があ

ると反論しています。両者のこの論争は、中国でも、日本古代でも、激しい応酬が繰り返されました。ところが鎌倉時代になると貞慶や良遍は、「無性」概念の設定は実は方便であって、本当は「悉有仏性」なのだとして論じています。これは法相宗の自己否定といってよいほど、大胆な考えです。これほど新しい考えを提起しているのですから、鎌倉新仏教の祖と呼んでよいと思いますが、私たちはなぜか貞慶を旧仏教の復興に分類しています。なぜでしょうか。

叡尊はどうでしょう。叡尊の西大寺流は鎌倉中期から爆発的に発展します。中国から最新の戒律の教えを取り入れる一方、技術者集団を抱えて公共事業の受け皿となりました。真面目に戒律を遵守する人々だからその仕事は信頼できるということで、寺社の修造や港・橋の修築など、ゼネコンのような活動を全国的に展開しています。この西大寺流は、これまでの律宗とは戒律の考え方が違っていましたし、人間集団としても全く別物です。つまり従来の律宗とは、教義も教団も異なっています。とすれば叡尊

を鎌倉新仏教の祖と呼んでよいと思いますが、彼は旧仏教の復興に入っています。なぜでしょうか。

では、日蓮はどうでしょう。彼は自らの教えを天台法華宗と呼んでおり、天台宗の復興を目指しました。中世の延暦寺では密教が盛行していて、天台宗は冷遇されていました。そのこともあって、日蓮は天台宗を復興しようと思いました。そして実際、南北朝・室町時代の日蓮宗の寺院は延暦寺の末寺でしたし、僧侶たちも多くが延暦寺で学んでいます。とすれば、日蓮を旧仏教の復興に入れてよいと思いますが、なぜか鎌倉新仏教に分類されています。なぜでしょう。よく分かりません。

旧仏教の復興と鎌倉新仏教とを弁別する基準は、一体、何なのでしょう。その答えは意外なところにあります。実はその基準は江戸時代です。江戸時代に独自の宗派として認められたもののうち、鎌倉時代の宗祖を戴いたもの、これが鎌倉新仏教なのです。

貞慶は新しい思想を提起しましたが、独自の教団をつくらなかった。そのため、彼の考えは法相宗に受け入れられ融合してゆきます。西大寺流は鎌倉中期から南北朝時代に爆発的に発展しますが、衰えるのも早かった。急速に衰退して、江戸時代には独自の教団を構成することができず、真言宗と律宗に編入されています。それに対し日蓮宗は戦国時代に自立・発展したため、独立した宗派と認められました。このように、鎌倉新仏教か、旧仏教の復興かの分類基準は、江戸時代の処遇にあります。これはおかしな話ではありませんか。鎌倉仏教の分類が、400年後の処遇のされ方で決まっているのです。これでは学問と言えません。鎌倉仏教の分類は、当然その内在性に即してなされるべきです。

鎌倉新仏教ではなく、「戦国新仏教」と呼ぶべきだと提言する研究者もいます。戦国時代に仏教界でも下剋上がおこって、旧仏教・五山派に代わって、日蓮宗・浄土真宗・曹洞宗などが自立・発展していったからです。戦国時代に社会的実体をもつようになったのだから、「戦国新仏教」と呼ぼう、ということです。それでもよいと思いますが、私はむしろ「江戸新仏教」と呼んだ方が実態に即していると思います。いずれにせよ、「新仏教」という概念は、戦国時代や江戸時代の宗派秩序を理解するには役に立ちますが、鎌倉時代の仏教を考える時には何の意味もありません。混乱を招くだけの有害無益な用語です。

## 2. 旧仏教の質的变化

では、私たちは中世の仏教史をどのように理解すればよいのでしょうか。これまでの議論の最大の欠陥は、旧仏教の質的变化を見逃してきたことです。私たちは鎌倉新仏教を民衆仏教だと言ってきましたが、仏教の民衆化はすでに旧仏教が達成しています。

たいていの仏教史の概説書では、旧仏教の叙述は平安時代の初めで終わっています。最澄と空海の登場、あるいはその弟子たちの動向に触れると、その後は旧仏教についてのまともな叙述は出てきません。強訴や合戦に明け暮れ、腐敗と墮落、混迷と退廃を重ねていった、といった話に終始しています。でも、旧仏教の歴史の最大の画期は平安中期です。律令体制の崩壊がそれをもたらしました。

律令体制のもとにあっては、<sup>そうにりょう</sup>仏教は僧尼令という法律の規制を受けていました。私度が禁じられ、民衆を惑わせるということで民間布教にも規制が加えられ自由に活動することができなくなりました。古代仏教は経済的には保護されていましたが、さまざまな規制で、<sup>がんじがらめ</sup>に縛られていたのです。ところが10世紀の律令体制の崩壊を契機に、政策が大きく変化します。

王朝国家体制の特徴は、大きな政府から小さな政府への転換、規制緩和と民営化と地方分権です。今の時代と同じです。膨大な財政赤字に悩まされれば、政治家の考えることは似たり寄ったりです。人頭税中心から地稅中心に変化して、僧侶であることと租稅の問題は切り離されました。そして、仏教を縛っていた規制を撤廃して活動の自由を与える一方、経済面では自助努力に委ねたのです。古代の僧侶は一種の国家公務員のような存在でしたが、もはや給料はほとんど出なくなりました。

古代寺院はたちまち経済的な危機に直面します。考古学の発掘成果によれば、10世紀に廃絶した寺院がたいへん多い。これは中世社会への転換期を乗り切ることができずに、多くのお寺が消えていったことを物語っています。しかし、消えたお寺が多かったものの、新しく生まれ変わった寺院もありました。その代表が延暦寺であり、興福寺です。彼らは新たな基盤をもとめて、貴族や民衆の世界に積極的に入ってゆきました。

### 3. 旧仏教の民衆化

旧仏教が民衆の世界に進出したというと、意外に思われるかも知れません。しかし少し視点を変えれば、それを示す事例は数多くあります。強訴です。

1156年に朝廷は、寺社勢力が「数千の神人」「巨多の講衆」を編成して、地方行政をマヒさせていると非難しています。民衆を講に編成したのは一向一揆が有名ですが、それよりはるか以前の段階で、すでに旧仏教は民衆の世界の中に分け入って、彼らを組織していたのです。旧仏教は民衆の世界に深く進入しています。

私たちはこれまで強訴をマイナスイメージで捉えてきました。でも、その評価は正しいのでしょうか。王朝国家体制で地方分権が進められた結果、地方行政は利権の巢窟となり、国司や武士によって食いにされました。「受領は倒る所に土をつかめ」(『今昔物語集』)と言われた時代です。これに対する民衆の不満を「悪僧」が組織しました。

国司が地方を食い物にしているのを訴えた事例は、10世紀に多く登場します。988年の「尾張国郡司百姓等解」は大変有名ですが、このタイプの訴えは11世紀には消滅し、代わって登場するのが強訴です。歴史的系譜からすれば、強訴は明らかに「尾張国郡司百姓等解」の延長上にあります。「郡司百姓等解」が民衆運動であるなら、悪僧たちの強訴にも民衆運動としての一面があるはずですが。

もちろん「山階道理」という言葉があるように、彼らの要求内容は無茶苦茶です。しかし、それはあくまで身分制の原則を逸脱した無茶な要求だということであって、本当の意味で無茶な要求であったかどうかは話が別です。

新しい租税の賦課に民衆は抵抗し、国司は武士を派遣してその抵抗を強権的に弾圧しました。こういう軋轢のなかで一人や二人の百姓をたたき殺したからといって、その政治責任を問われて国司が罷免・流罪にあうなどといったことは、当時の常識からすれば考えられない話です。しかし悪僧たちは神仏の権威を背景に、この無茶な要求を突きつけ、そして実現しました。旧仏教の中世的発展の原動力はここにあります。国司や武士の横暴に対する民衆の不満を汲み取り、それを正していったところに旧仏教の発展の鍵があったのです。

では教義の面ではどうでしょうか。これまで旧仏

教は貴族仏教であって、民衆救済を行わなかったと言われてきました。しかし、このような話の学問的根拠は完全に崩壊しています。旧仏教の文献を少し調べれば、悪人往生や女人成仏の話は無数に登場します。

たとえば10世紀、延暦寺で編纂された『阿弥陀新十疑』という書物をご覧ください。そこでは、煩惱を背負った凡夫であっても念仏の力で極楽往生できると説いていますし、どんな悪人でも臨終のときに念仏を唱えれば往生できると語っています。こういう類の文献は数多く存在しており、悪人正機説を唱えたものまで見つかっています。悪人往生や悪人成仏は、旧仏教の世界で常識だったのです。

では、こういう常識は世俗社会に広まっていたのでしょうか。『中右記』という日記があります。藤原宗忠という貴族の日記ですが、1120年の記事に「弥陀の本願は重罪人も棄てざるなり。これによりて往生の志ある人は、ただ念仏を修すべきなり」と書いてあります。どんな悪人でも、往生したければ念仏を唱えよ、と普通の貴族が日記に記しているのです。さらに『梁塵秘抄』をみてください。平安末に流行していた今様の歌詞を編纂したものが、その中に次のような歌が出てきます。

弥陀の誓ひぞ頼もしき、十悪五逆の人なれど、  
一度御名を称ふれば、来迎引接疑はず

どのような極悪人であっても、たった一度の念仏で極楽往生できる、と謡っています。これが流行歌で謡われていたのです。法然が浄土宗を開く前、親鸞が誕生する以前の話です。『中右記』や『梁塵秘抄』の歌が根拠にしていたのは旧仏教の悪人往生論です。旧仏教の教えは民衆の世界にまで届いていました。仏教を民衆に開放するという課題は、鎌倉新仏教が実現したのではありません。それ以前に、旧仏教が達成していました。

旧仏教の質的な変化は、民衆化だけではありません。院政時代、旧仏教は国家との関係を再構築することに成功します。成功の鍵は末法思想です。旧仏教は意図的に末法思想を喧伝して、危機意識をあおりました。「国司や武士の横暴によって、寺院経済は破滅の危機に瀕している。この事態を放置すれば、仏法は破滅し日本は末法に飲み込まれて戦乱の世となるだろう。末法への転落から日本を救いたければ、仏法を興隆して寺院経済を安定させなければならない」、旧仏教はこう主張して、平和を実現するには

莊園寄進が必要だと訴えました。そしてこの主張が、転換期を生きる貴族たちの不安を捉えて、朝廷は仏教保護にのめり込んでゆきます。壮麗な大寺院（六勝寺）が次々に建てられました。

こうして旧仏教は院政時代に最盛期を迎えます。仏教が民衆の世界にまで広まっていったのも、こうした旧仏教の隆盛の一環です。法然や親鸞は偉大な思想家だと思いますが、しかし彼らの偉大さは、仏教を民衆に開放したことにあつたわけではありません。

#### 4. 鎌倉時代の仏教改革

では、鎌倉時代に仏教の改革運動が起きた原因は何でしょうか。ここでいう仏教改革とは、これまで旧仏教の復興と言われてきたものとほぼ一致します（ただし栄西がここに入ります）。このグループの人々には、ある共通点があります。戒律です。貞慶は法相宗と戒律、明恵は華嚴宗と戒律を掲げましたし、栄西は禅と戒律、俊苾は天台真言と戒律、そして叡尊は真言宗と戒律を標榜しています。戒律をベースに、それぞれの教えを活性化しようというのがその特徴です。

平安後期の仏教界は、悟りを絶対化する傾向があつて、その反面、戒律・修行のような外形的なものをバカにする風潮がありました。「山林斗藪で悟りが開けるなら、山猿はみんな悟っているはずだ。山を歩き回って悟りを開こうとする連中は山猿と同じだ」、そう嘲笑しました。この風潮は仏教界の貴族化と関わっています。肉体労働を蔑む貴族文化が、戒律・修行の軽視とマッチしたのです。律宗の地位はどんどん低下して百姓の学問とバカにされ、空海・最澄に仮託された偽書が作られて破戒を肯定しています。「密教僧に戒律は不要だ」「末代に持戒はありえない」。そしてこうした風潮が悪僧たちの行動を思想的に支えていました。

その帰結が南都焼き打ちです。戒律を無視して合戦を繰り返した挙げ句、悪僧たちは以仁王の挙兵に呼応し、それが平氏の焼き打ちを招いたのです。この衝撃は仏教界に深刻な反省を促しました。しかも治承・寿永の内乱が勃発したことは、旧仏教の祈祷に効き目がなかったことを意味しています。莫大な金を投じてきたにも関わらず、何の効き目もありませんでした。なぜ平和の祈りが効かなかったのか。原因は破戒だ。破戒僧の祈祷に神仏が応えるはずがない。ということで、鎌倉時代は一転して戒律がブ

ームになってゆきます。

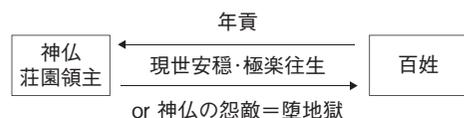
この改革運動は、悪僧対策に苦慮していた朝廷や幕府の支持を得ました。「王法は仏法の主なり」（栄西）のように、彼らが仏教を王権に奉仕するものと考えていたことも、支持された要因です。これまで私たちは旧仏教の復興を、鎌倉新仏教への対抗運動と理解してきました。しかし実際にはそれは、悪僧批判のなかから登場してきたのです。

この改革運動はやがて禅律僧に引き継がれます。西大寺流や臨濟禅の僧侶を当時「禅律僧」と呼びました。彼らの共通点も戒律です。私利私欲を排して禁欲をつらぬいたため、彼らは朝廷や幕府の支援をうけて、寺社の修造や交通路の整備に活躍しました。こうして禅律僧は、旧仏教とともに中世の体制仏教の一角を占めるようになります。旧仏教も禅律僧も、基本的な仏教観・世界観に大差はありません。真面目な旧仏教、これが禅律僧です。

#### 5. 仏教の純粹化

では、法然・親鸞たちの意義は何なのでしょう。旧仏教は確かに民衆の世界に教えを広めました。しかし、それは民衆の心を呪縛することでもありました。たとえば、旧仏教のある寺院は、1192年に莊園の民衆に次のように言っています。「莊官や百姓たちは一生懸命に開発を行って、年貢をきちんと納めなさい。そうすれば、お前たちには現生安穩と極楽往生が約束されますよ」と。民衆が行うべきことは念仏を唱えることでもなければ、法華経を読むことでもない。年貢を納めることだ。そうすれば極楽往生できる、と言っています。しかし他方では、「もしも寺の命に背く者がいたなら、彼らには神罰、仏罰が下るだろう」とおどしています。さらにある寺院では、1347年から四季の祈祷という法会を始めました。ここでは、年貢を納めなかった者や寺命に背いた人の名前を書き上げて、彼らを呪う儀式を行っています。年に4回、従順でない百姓を呪っていたのです。

図に示したように、中世では神や仏は領主と一体化していました。農民たちが領主に奉仕すれば、それは神仏に奉仕をすることでもあります。そのため、



従順な農民には極楽往生が約束されました。しかし他方では、領主の命に背くことは神仏に敵対することでもありますから、反抗する農民には神の敵、仏の敵という烙印が押されます。「年貢を納めたならば極楽往生できるが、領主に背けば地獄に墮ちる」、これが中世民衆が日常的に接していた仏教の教えでした。ここでは、来世の恐怖感で現世の支配が成り立っています。この他にも、女性差別や身分差別を正当化するなど、仏教の教えが歪められ、支配の道具になっていました。

法然や親鸞、道元、日蓮たちが思想形成をしたころ、仏教の現実はこのようものでした。これに対する反発から、彼らは真の仏法を探し求めます。仏教の現実に対する怒り、これが彼らを真の仏法への探求へと向かわせた原動力です。そして彼らは、自らの個性と資質に即してその回答を出しました。

法然は民衆に向かって、「あなたたちは悪人ではない。善人だ」と語りました。旧仏教の教えでは、狩猟や漁業は勿論のこと、農業や炭焼きに至るまで、殺生の業とされていました。田んぼを耕すと虫が死にます。こうして人間の労働は罪とされ、その罪をあがなうために、お寺（旧仏教）への奉仕が求められました。それに対し法然は、「あなた方の悪など大したことではない。皆さんはすべて平等に善人だ。謂れのない罪意識に悩む必要はない」、そう民衆に語りかけました。親鸞は「すべての人間は平等に悪人だ」と主張しました。私たちすべての人間は、悪を犯そうとしたことがあるはずだし、悪を犯しうる存在だ、そう主張してこのことに無自覚な旧仏教の僧侶をきびしく批判しました。

「平等に善人だ」「平等に悪人だ」、二人の言葉は正反対のように見えますが、実は同じことを言っています。彼らはいずれも人間の平等を説いているのです。

道元は「女人、何の咎かある。男子、何の徳かある」（『正法眼蔵』）と語って、女人罪業観を否定しました。人間の罪に男女差は関係ありません。さらに彼は、女性を不浄視して寺院への立ち入りを禁止する女人結界を、「魔界」と非難しました。当時、延暦寺や高野山が女人結界となっていたのですが、道元はそれを悪魔の巢窟と批判して、その解体を主張したのです。日蓮は、「国王をはじめすべての人間は、法華経を純粹に信仰する義務を平等に負っている」、そう主張して、政府の政策を激しく非難し

ました。そのため迫害されるのですが、それに対し日蓮は、次のように語っています。「王地に生まれれば、身をば随へられたてまつるやうなりとも、心をば随へられたてまつるべからず」（『撰時抄』）。（国王の支配する土地に生きている以上、我々の身体を服従させることはできるかも知れない。しかしたとえ国王であっても、私たちの心を服従させることはできない。）

このように彼らは、仏法を純粹化し絶対化してゆくことによって、社会に鋭い批判の目を向けました。改革派の人々とは異なり、仏法を権力の僕とは考えませんでした。年貢を納めれば極楽に行けるが、領主に背くと地獄に墮ちる。こういう世界観が民衆の心をごんじがらめに縛っていた中で、彼らは「念仏以外に価値はない」「法華経以外は仏法ではない」、そう主張して民衆の心を解放したのです。

もちろん、平等や心の解放では腹の足しにはなりません。ですから中世民衆の多くは、旧仏教の平和と繁栄の祈りに依存していました。また専修念仏は悪魔の教えだとして朝廷や幕府から弾圧されました。そういうこともあって、彼らの思想はなかなか中世社会に受け入れられていません。でも、彼らの思想は中世という時代を超えた普遍性をもっています。平等の教えと鋭い批判精神、彼らの著作が今なお私たちにある種の感動を与えるのは、その普遍性にあるのだと思います。

さて、戦国時代になると、仏教の現世的機能が衰えてゆきます。軍事技術が急速に発展するなど、技術が次第に宗教から自立していったことがその背景です。旧仏教は平和と繁栄を祈りの力で実現すると約束しましたが、人々は次第にそれを信じなくなりました。仏教の役割は現世から来世に移ってゆきます。これまで現世の祈りを中心にしてきた旧仏教は、もはや時代の変化についてゆくことができません。戦国時代に仏教界の下剋上が起こったのは、仏教に求められる社会的役割の変化が一因です。

葬式仏教の時代がこうして始まります。それはまた、祈りの力でこの世の幸福を実現しようとする宗教的現世主義の時代から、世俗的現世主義への転換でもありました。社会全体が脱宗教化してゆきます。かつて仏教は社会のあらゆる領域に影響を及ぼしましたが、今や仏教の影響は限定的なものとなります。「葬式仏教の時代」とは、「仏教の時代」の終焉でもあったのです。